

部材に魅せられて

古宮 正章

かつて製造業の融資を担当していた頃、できたての伸銅コイルの美しさに魅せられて以来、素材の持つ深みの虜になってしまった。工場の中に並べられた巨大な薄板のロールは、たまに目にする新製10円赤銅貨のごとく、気品にあふれた輝きを放っていた。一般的に、見る者にとっては、自動車のように最終財としてできあがってくるものの方に興味を持ちやすいが、素材、あるいはそれに加工が施された部材を少しずつ勉強していくと、実は驚くべき秘められた質性を備えたものが多く、これが本来の、日本の競争力の根源なのではないかと得心するようになった。それを見ただけでは、そうした特性は見えにくいし、そもそも何に使われるのかは殆ど見当がつかないものも少なくない。機能性樹脂や特殊合金などはその典型であるとともに、その特質を存分に活かした各部材をどう組み上げていくかは、我が国の得意とするところなのである。もっともメーカーの方に、「正直に言って、自社製品がどう使われているのかよくわからない」と苦笑いされたこともある。つい、マーケティングとしては如何なものかなどとお節介にも口を出したいところであるが、この場合は機密保持の観点があったようで、当然闇雲に作っているわけではなく、ユーザーの高度な注文をこなしてそのシェアポジションを獲得したのである。

我が国の貿易財(輸出)にしめる中間財のウエイトは、1985年当時34%であったものが、2014年には59%に上昇したとの統計がある(経済産業研究所編集のデータに基づく。この場合の中間財には素材というよりはかなり加工度の高い部材が多く含まれている)。これは、裏を返せば、テレビやパソコンなどの最終組み立て工程は、安い労働力を求めて海外移転を進めてきたことを意味している。一方、この中間財輸出にシフトする傾向は韓国なども同様であり、特にアジア地域の相互の貿易量が、財の種別によってどのように変わってきたのかを概観すると、それぞれの産業社会の発展に応じた自然な流れと言ってもよく、我が国だけが将来にわたって安寧の地を得たというわけでは決していない。ただ、じわじわと追われながらも、日本製の部品

(部材)がないと高品質な最終財は整わないという面は空威張りではないようだ。

東レは、50年もの間地道に炭素繊維の開発を続けて、ボーイング社の新機材に納入する栄冠を勝ち取ったとされる。雌伏1年、ある日突然日の目を見ることを目指してきたのかと思いきや、それは認識違いのようだ。その間各ユーザー候補と、炭素繊維の用途とそのための機能のアイデアを共有しながら、その都度新たな製品の開発にチャレンジ、具体化し、ついに高度な航空機本体の基幹素材にまで育て上げたというのが本当のところらしい。繰り返しになるが、素材、部材系の製品は、ある程度用途を想定しながら開発されるのだが、実はそれを大きく超えて、連鎖的にマーケットが広がる可能性も小さくない。ある目標値が達成された段階で完了というわけでもない。稼働後のメンテナンスの都合なども視野に入れて設計が進められる面も見逃せない。大事なのは設計段階から共同研究、コミュニケーションを通じて開発を継続するスタイルなのである。自前主義の脱却が必要とされる中で、こうした垂直方向でのリレーションも、ある意味でオープンイノベーションの企てであると考ええる。設計開発とマーケティングはサプライチェーンの川上と川下に分離して認識されがちだが、特に中間部材については、これらは一体的に進められることが一層重要であると考ええる。もちろん海外企業との連携も、選択肢の一つであろう。そしてこうした分野を強め、我が国の持続的成長を果たすためには、専門的な技術能力の涵養とともに、海外も含めたネットワーク作りの能力、コミュニケーション能力にも優れた、アイデア豊かな人材の育成が必須であることは言うまでもない。

【当コラムは、(一財)日本経済研究所 機関誌「日経研月報」に掲載された「設研の視点」を転載したものです】